

《第9回国際日本学シンポジウム報告8》

大英博物館所蔵 日本の陶器コレクションの歴史

ニコル・クーリジ・ルーマニエール*

本日は、大英博物館が所蔵する日本の陶器コレクションについて、特にオーガスタス・ウォラストン・フランス（1826-1897）の活躍を中心にお話したいと思います。バース勲章、王立学会特別研究員、オックスフォード、ケンブリッジ両大学の名誉教授という多くの立派な肩書きを持つフランスは、1866年から1896年にかけて大英博物館の学芸担当部長として活躍しました。彼は個人の趣味から、そして大英博物館の一学芸員として、日本の陶器を収集しました。彼の蒐集品は、当時の大英博物館がどのような日本美術を集めていたのか、そしてそのコレクションが英国でどのように受け止められたかを伝えてくれます。さらに、それらの考察によって、大英博物館の日本陶器コレクションに対する理解が深まるだけでなく、後期ビクトリア時代のイギリスと明治時代の日本の美的・経済的・知的交流が明らかにされます。これは非常に広い分野ですが、本日は時間もかぎられていますので、フランスと彼の陶器コレクションに的を絞って話をすすめます。その中で「加賀」の九谷焼に少し触れ、最後にフランスのコレクションが大英博物館の後世の学芸員にどのように受け止められたかについて、お話できればと思います。

日本の陶器は、大英博の設立時当初からその所蔵品の一部をなしていました。1753年、議会議法が可決され、ハンズ・スローン卿（1660-1753）の個人コレクションと蔵書を収蔵するために大英

博物館は設立されました。スローン卿はかねてから日本に関する知識があり、エンゲルベルト・ケンペルの妻と甥から、ケンペルの遺品である多くの作品と書物を購入しました。大英設立時、旧ケンペル・コレクションには少なくとも6点の日本製焼物があったと言われています。6点のうち、現川焼の小さな鉢が3点、肥前焼の香炉が2点、そして1点は小さな有田産の肥前焼香合でした。ケンペルの焼物は、すべて九州で製作されたものです。現川焼の小鉢は、元禄時代に国内向けに焼かれたもので、ケンペルが長崎で購入したと思われます。2点の香炉は、金銀の彩色が施してあり、ケンペルが日本に渡る数十年前の1660年代の作と考えられています。これもケンペルが日本で購入したものでしょう。金銀彩染付肥前焼香合は17世紀後半の海外輸出用の様式のもので、類似のものが英国のパーリー・ハウス及び個人所蔵品に見られます。ケンペルは、この作品を日本以外で購入したか、受け取った可能性があります。

大英博物館は、この6点の初期コレクションを基盤とし、いまでは3,500点におよぶ日本の焼物を所蔵しています。内訳は、ほぼ同数の土器・炆器と磁器で、これらはそれぞれ、一室に土器・炆器、第二室に磁器、そして三室目には近代の焼物、肥前焼の柴田コレクションと新規受入れ作品というように焼物専用の収蔵庫三室に収蔵されています。第三室には新しい収蔵ケースが設けられ、作品をより効率的に収納することが可能になります。

大英博物館の日本コレクションは寄贈・購入を通じ、徐々にではありますが、確実に増えていきます。最近の例としては、三代徳田八十吉先生が、

*イギリス セインズベリー日本藝術研究所所長 東京大学大学院人文社会系研究科、文化資源学専攻 客員教授

2007年開催の特別展「わざの美 伝統工芸の50年展」を記念して、すばらしい大きな耀彩壺を寄贈してくださいました。2006年には、縄文時代の土偶が2点コレクションに加わり、常設のジャパン・ギャラリーに展示されています。コレクションは、縄文から現代までの幅広い時代にわたりますが、中でも古墳時代の発掘品と江戸初期から中期の磁器、そして江戸後期から明治初期の焼物が充実しています。この大規模な焼物コレクションの約半数は、フランスによって集められました。フランスの独力により形成されたといっても過言ではないほどです。彼は蒐集範囲を定め、登録法を導入したほか、日本の焼物産業を包括的かつ忠実に反映した展示となるよう努めました。結果として彼の試みは成功し、大英のコレクションは、日本の焼物の歴史を包括的に語るものとなっています。あえて欠けている分野をあげれば、尾形乾山などの江戸時代に活躍した作家の作品でしょう。大英博物館の焼物コレクションをより深く理解するには、フランスの分類学的取組みを理解する必要があります。彼の交友関係、教育はもとより、大英帝国最盛期であった1850-80年代のビクトリア時代の社会・学問をめぐる環境は、フランスに多大な刺激を与えました。

フランスは1851年、ロンドンでクリスタル・パレス博覧会が開催された年に大英博物館に採用されました。フランスは上流階級出身であり、当時彼のような階級の人物がいわゆるサラリーマンとして働くことは極めて異例なことでした。しかし、彼は45年という長期にわたり大英での職に全身全霊をささげ、退職後一年で他界しました。つまり、フランスは、19世紀後半すべてを大英での仕事に尽力したのです。

1826年にジュネーブで生まれ、語学に長けていたフランスは、フランス語、ドイツ語、イタリア語を流暢に話しました。幼少時代（1828-1833）をローマで過ごした後、1843年後半にロンドンへ移住します。育ちも考え方もヨーロッパ

的であったフランスは、同時代のイギリス人とは異なる価値観を持っていました。イートン校卒業後、ケンブリッジ大学のトリニティー・カレッジに入学と、当時の上流階級子息の典型的な教育の道を進みます。若い時から聡明で、早くから磁器と分類法に関心を持っていたフランスは、卒業した年には中世の磁器の釉薬様式についての本を出版します。この著書はフランスが、当時北ヨーロッパの自然科学者たちの中で話題になりつつあった、類型学についてすでに知識を持っていたことを我々に知らせてくれます。有名な自然科学者である後見人に幼い頃から感化されていたフランスは、自分のミドルネームには、敬意を表して、後見人の名「ウォラストーン」を使用していました。

大英博物館で勤務を始めて早期から、フランスは日本の歴史と物質文化に興味を抱き、1860年代には日本の美術品を蒐集していました。当初は小さなものに惹かれていたようで、根付けや鏝などを集めます。科学に関心を持つビクトリア人として、特に考古学に熱心だったフランスは、日本に着目しました。エドワード・シルベスター・モースが訪日する約10年も前の1868年、明治元年に彼は日本の石器時代についてロンドンの古物研究家協会で開催された先史考古国際会議で講演をし、論文を執筆しています。

フランスは1897年に他界しますが、未婚で子供もなかった彼は、個人の趣味で集めた日本の焼物も含め財産を大英に寄贈しました。残念ながらフランスは論文帳面などすべて焼却するよう彼の助手のチャールズ・ハーキュレス・リード（Charles Hercules Read）に命じ、またリード自身も、自分が亡くなった後には帳面を焼き捨てるよう遺言したため、これらの貴重な書類はほぼ失われてしまいましたが、稀にフランス宛への手紙やそれに答えた彼の書簡が発見されます。これらの書類は、フランスの、日本にとどまらない幅広い文化・時代にわたる蒐集の動機を語っていま

す。たとえば、フランスは、彼の友人であったクリストファー・ドレッサーの作品をはじめ大英博物館に取得しましたが、それはパプア・ニューギニアの神をかたどった陶磁器の灰皿でした。

フランスは日本の焼物の蒐集を1860年後半から始め、70年代に興味は着実に強くなっていき、70年代後半から80年代初めにかけてその熱意はピークに達しました。その後は、時折日本の焼物を購入することはあったものの、彼の興味は中国、イスラム、そしてイギリス列島の考古遺物の蒐集に移ってゆきます。注目すべきことに、フランスは他のコレクターたちに経済的・知識的な支援を求め、彼らのコレクションを大英に寄贈するよう働きかけました。コレクションには、やはり焼物が多くみられ、ウィリアム・ガウランドやAFトッドの所蔵品も含まれています。寄贈された作品は、彼の監督のもと元コレクターの名前、フランスの名前、そして彼が考案した独自の登録番号が丁寧に記録されました。自ら作品の記録をとったため、今でも彼が集めた焼物の底や、解説ラベル、目録表、登録記録書などにはフランス自身の筆跡が見られます。丁寧にまとめられた記録書には作品の素描も含まれており、外見、寸法、購入価格、わかっている場合は来歴、特徴などが記載されています。これらの記録を数年後オンラインで公開できるよう、現在大英博物館においてデータ化がすすめられています。

フランスは単に数多くの作品を集めることには興味がなかったようで、可能な限り計画的かつ厳密に収集しました。美術史学者のクレーグ・クルーナス氏は、「主要な博物館が設立された19世紀半ばまでには、蒐集に関する男性的な見解に基づき、科学的な分類と単なる蒐集は分離された」と説明しています (Clunas, p. 323)。フランスの交友関係は、ビクトリア時代の科学的・男性的思想を支えた三つの機関、すなわち古物研究家協会 (自然科学協会)、アテネウム (現在でも女性

の入会を認めない社交クラブ) と大英博物館を中心としていました。フランスの親しい友人や食事仲間には、ジョサイア・ウェッジウッドの孫婿でもあるチャールズ・ダーウィン、ルーサフォード・オルコック卿、クリストファー・ドレッサー、フレデリック・レイトン爵、ピット・リバーズ長官などがいました。

フランスの科学的蒐集に対する熱意は、彼が自身の日本・中国焼物コレクションの図録を自費で改訂したことからも伺うことができます。サウス・ケンジントン博物館現ビクトリア・アンド・アルバート美術館の別館であったベスナル・グリーン博物館で1876年に開催された展覧会図録『Catalogue of a Collection of Oriental Porcelain and Pottery, (東洋陶磁器コレクション図録)』を、フランスは1877年に再編集しました。これに関しては、他の発表ですでに詳しく話しましたが、フランスによる再版の前書きを少し紹介します。

この図録の初版が出版されて以来、私はコレクションをより完全なものにしようと試みてきた。特に日本のコレクションは満足のものではなく、陶器という重要な分野が欠落していた。以後、骨董や美術品が大量に輸入され、これら作品の解説書は、正確さにばらつきはあるもののこの分野の研究に多に役に立った。しかしながら、フィラデルフィアで展示された後、サウス・ケンジントン博物館が購入した日本コレクションの報告書は、今までで一番信頼できる情報だと確信している。館長が報告書の閲覧を許可してくれたおかげで、今までの情報を確認し訂正することができ、この図録の意義を大いに増すことができた。また日本の磁器の銘に関しては、南条氏、カサワラ氏、そして彼らのイギリスの友人デビッド・ヘアー氏、そして馬場氏といった優秀な方々の助力を得る事ができた。

フランスが最も興味をもっていたのは、焼物の「起源」を追求する事でした。つまりフランスは、科学的な分類学だけでなく、もう一步踏み出して、作品の真偽を確かめようとしたのです。彼は日本の国内市場向けの作品と「輸出向けの作品、当時の加賀焼と旧加賀焼（古九谷か江戸九谷）」の違いを理解しようと試みたのです。

1876年に初出版された焼物目録には、日本・中国という国以外には地域の生産地はほとんど記載されていません。代わりに、フランスは作品の外観にこだわり、文様や造形を忠実に表記しました。例えば、古九谷様式の九角皿の所蔵番号は「498a」と記され、それは1870年代前半にフランスが購入したものと考えられます。初版図録の解説には、「角がかたどられた九角形の皿。日本製の色彩された磁器。中心部には風景と岩から生えた古い木、そして三人の人物が描かれている。その周りは青い鱗模様に囲まれている。周縁は黒と緑の編目模様で装飾され、その上に四葉の形に囲まれた花が配置されている。作者のものと思われる銘あり。直径13.3/4 インチ」と書かれています。

一年後の再版には、製作場所と銘、その他の記録すべき情報が掲載されています。先ほどの「498a」番には、「印銘、と・だ・きち・へい、作者の名前」と新たに加えられています。フランスの情報は時に誤っていることもあるものの、フランスが日本語の情報や、アーネスト・サトーといった学者からの情報を参考にしていただと考えられます。また、この古九谷様式の九角皿と似たものが、パリのギメ美術館にも所蔵されており、焼物の購入先が共通していたかもしれないという可能性があり、興味深いことです。

フランスが受け入れた九谷周辺の焼物の多くは3つに分類されており、台帳には1092から1110番、1550番台と1700番台で登録されています。1100番台の作品は1877年に受け入れたもので、1550番台のものは1878年に、1700番台のも

のはさらに数年後に館の収蔵に加わったと考えられます。

例えば、作品番号1103番は、「五角形皿、ふちが内側にねじ曲がったもの。日本製磁器、赤に金彩、晋時代の七福神に雲、外側には童子五人、「九谷」の赤銘、九谷焼、製作地 加賀。直径7インチ (17.5cm)」と記されています。

作品番号1105番は、通常の解説の他に「赤銘、九谷、赤地に金字で「福」(ハッピーネス)」と書かれています。

1877年、彼が早期に購入した作品に小さな鴨形の香合があります(1097番)。これは、ごく短期間のみ活動した吉田屋の窯によると思われる作品です。この1097番には、「頭を背に休めている鴨型の容器。日本製色彩磁器。ふたの内側に黄地に黒字で「福」(ハッピーネス)。古加賀焼」と解説があり、「九谷」という言葉は使っていませんが、他の九谷焼とまとめて記録されています。また、「古加賀」の「古」は、純粋な加賀焼といった意味で、「現代」「輸出用」との区別をはかるものでした。薩摩焼も「古薩摩」と分類しています。フランスは、九谷焼を基本的に「色絵磁器」と分類し、産地を「加賀」としています。

1876年にフランスが手がけた中国・日本製焼物展示のきっかけの一つとして考えられるのが、1876年に開催されたフィラデルフィア博覧会とフランスの関わりです。イギリス政府は、博覧会で展示された日本の焼き物を購入する意図がありました。フランスは、交渉と手続きを積極的に進め、作品をサウス・ケンジントン博物館(現ビクトリア・アルバート美術館)に確保するよう働きかけ、また1880年に出版されたこのコレクションについてのガイドブックの編集にも重要な役割を果たしています。

イギリス政府は1875年、サウス・ケンジントン博物館に歴史的かつ包含的な日本の焼物コレクションを設けるため、100ポンドの融資をすることに合意します。後にこの金額は三分の一に減少

しますが、それでも十分な金額だったようです。ビクトリア・アンド・アルバート美術館の記録には、個々の作品の購入金額が記録されており、明治期の焼き物の1870年代中ごろの市場価格を示す貴重な資料となっています。

作品調達は概して、サウスケンジントンの初代館長の親戚で東京に駐在していたフリッツ・クンリフ・オウエン (Frits Cunliffe-Owen) という人物にまかされました。シオダという人物が作品の購入と解説を担当し、それをアサミ氏が英語に翻訳し、フランスが編集するといった手順で蒐集が行われました。蒐集はイギリスの観客に正統な日本の焼物史を伝えるという明確な意図のもとで行われました。

国のために日本製の焼物を購入する動機に関し、フランスは1880年に出版した自著の前書きでこう述べています。「フィラデルフィア博覧会の準備が進む中、サウス・ケンジントン博物館の上層部は、もっと古い焼物の名品が加えられれば、展覧会の日本部門はさらに素晴らしいものになると考えた。(中略) 博覧会后、これらの作品は(サウス・ケンジントン) 博物館に所蔵される事が決められた (Franks, 1900)。」彼が作品の選択に多いに影響を及ぼしたのは確実なことです。しかし、どれだけの影響があったかは未だに明らかにされていません。彼の個人助手で大英でのフランスの職の後継者となるチャールズ・ハーキュレス・リード (Charles Hercules Read) は、サウスケンジントン博物館に加わった日本の焼物すべての解説や銘などについて手書きの記録を1880年に制作しました。フランスの冊子「日本の焼物」(*Japanese Pottery*) の銅板イラストは、リードの図案をもとにしています。

「日本の焼物」は、縄文から明治の作品を取り上げ、中でも近世(江戸から明治初期)の作品を重視しています。また、九谷焼は別途、6点の作品を紹介しています。とりわけ17世紀中ごろに製作された古九谷青手様式の大鉢はすばらしい作品

で、フランスは「浅鉢、荒い磁器に紫、緑、黄色の色彩と黒い線が施されている。九谷焼、製作年代1620年」と書き残しています。この大鉢に4ポンド3シリング支払っており、1876年当時としてはかなりの額です。他の大部分の作品はこれよりも低額で購入されましたが、相馬焼の馬紋の茶碗は、当時人気を集めていたもので、先の大鉢と同じ金額が支払われています。フランスは多数の相馬焼茶碗を購入し、大英のコレクションに加えました。

結論

大英博物館とビクトリア・アンド・アルバート美術館が所蔵する日本の焼物コレクションは、ビクトリア時代に形成されたフランスの遺産の一部です。フランスのコレクションに関するこの論文が、明治時代前半に英国で集められた日本の焼物について少しでも紹介できたことと願います。

コレクション蒐集においてフランスが重視したことは、「産地」と「真正さ」でした。彼は自身を科学者とみなし、国家のために、国家を代表して蒐集するという一大任務を感じていました。この時代、英国は「大英帝国」という強固な意識を持っていた時代です。彼が収集した焼物の多くが、いまでは入手困難な名品と呼ぶにふさわしい物ですが、中にはそれほど希少とはいえないものや日本製ではないものもあります。しかしながら、これほどの多種多様な作品を厳格さをもって集めたところが重要です。

フランスは国家のために全力で奉仕し蒐集することで、自分の社会的地位を正当化させたかったともいえます。幼少期の海外生活、自己の生き方に悩みながらも、裕福な特権環境に身をおき、知己に富み学力優秀、成人期に肉体的な傷を負った——このように見るとフランスは明らかに、自ら選んだ蒐集にける道をまっしぐらに進む気質があったかに思われます。大英博物館とその所

蔵品を含め、彼はイギリスの科学界に大きな影響を及ぼしました。しかし、死後、彼の貢献も急速に世から忘れ去られます。

美術品は、変わりゆく思考を伝えるものでもあり、フランクが熱心に集めた焼物が過去100年間にわたり大英博物館でどのように受け継がれてきたかを検討することも必要です。フランクのように積極的な購入によってというより、寄贈などを通して増えているといえますが、コレクションは大切に守られてきています。

1924年に、当時学芸部長であったR.L.ホブソンは、大英博物館刊行の『極東アジア古美術の陶磁器小冊子』の前書きにこう記しています。「フランクのコレクションは、最大級の評価に値する。作品個々の希少価値はもとより、オリエントの焼物を包括的に科学的に検証できる特異なコレクションだからだ。」小冊子ではこのようにフランクを高く評価したものの、ホブソンはこの後、フランクのコレクションを重視することはありませんでした。

大英博物館東洋部学芸員のソーム・ジェニズ (Soame Jenyns) は、1965年に大英博物館所蔵の日本磁器に関する本を出版しましたが、フランクについての記述は、注釈事項として2箇所しかありません (p. 185, p. 267)。また、バスナル・グリーンでの展覧会図録についての記述もなく、唯一フランクの焼物の小冊子について述べているのみです。ただし、挿絵にはフランクの焼物を使用しています。ジェニズは、フランクのコレクションについて、自著の *Japanese Pottery* (1971, p.98) でひどく批判します。そこでは、「現に我々国民のために集めた作品はこの時期 (19世紀後半) に蒐集されたものばかりで、大半が低レベルの代物である。結果として、間違った日本の印象を与えている。」¹ という、1930年のホブソンのコメントを引用し、ジェニズもこの意見に追従しています。ジェニズは「現在のわれわれが見るとくだらないと思える19世紀に蒐集され

たこれらの焼物は、その当時の状況や考え方のレベルがいかに低いかを見極めるのに役立つ… (中略) フリア・ギャラリー、大英博物館などアメリカ・ヨーロッパの博物館では、その後に蒐集された焼物により主要のコレクションが形成された。これらのコレクションにとって、モースの収集品は、単なる布石でしかなかった。ところが、主要コレクションが形成されたころには、モースはすでに、焼物界での権威となっていた。」と書いています。

前述のように、フランクは、日本の陶磁器をモースが有名になる前から集め、またモースに影響されることなくコレクションを形成しています。両者は互いに交流がありました。フランクは少なくとも二度イギリスでモースに会い、一度はフランク宅で昼食をとまっています。しかし、フランクの著書はすべて1880年以前に出版されたものであり、彼は一度もモースについて著述する事はありませんでした。モース自身のコレクション図録は、フランクの他界から4年後の1901年に出版されました。

フランクは、自身の蒐集品の寄贈を含め、大英博物館のコレクションを作り上げました。それらは、縄文から明治のものまで1000点以上にも及び、ヨーロッパ有数の包括的な日本焼物コレクションと言えます。この焼物コレクションの形成とその規模、趣旨はすべてA.W.フランクが残した遺産だといえます。

【注】

- 1 Jenyns, 1971, p.1 from Hobson, 1930 "Notes on Japanese Pottery" Transaction and Proceedings of the Japan Society XXVIII, 1930, p.98.

Select Western Language Bibliography for Collecting Japanese Ceramic in Victorian Britain

Ahrens, H. and Co. (eds), *Kwan-Ko-Dzu-Settsu, Historique et Descriptive sur les Arts et Industries Japonais par Ninagawa Noritane*. Tokio, 1877, 1878.

- Alcock, Sir Rutherford, *International Exhibition 1862, Catalogue of Works of Industry and Art sent from Japan*. London, 1862.
- Audsley, George Ashdown and James Lord Bowes, *Keramic Art of Japan*, 1879.
- Baird, Christina, 'Japan and Liverpool: James Lord Bowes and his Legacy', *Journal of the History of Collection* 12, no. 1 (2000), pp. 127-137.
- Bowes, James Lord, *Japanese Pottery*. London: Edward Howell, 1890.
- Bowes, James Lord, *A Vindication of the Decorated Pottery of Japan*, Liverpool, 1891.
- Bowes, James Lord, *A Handbook of the Bowes Museum*, Liverpool 1897.
- Caygill, Marjorie, and John Cherry (eds), *A.W. Franks: 19th-century Collecting and the British Museum*. London: British Museum Press, 1997.
- Clunas, Craig, 'Oriental Antiquities/ Far Eastern Art.' *Positions: East Asian Cultures Critique*, vol. 2, no. 2 (Fall 1994), pp. 318-354.
- Faulkner, Rupert and Anna Jackson, 'The Meiji Period in South Kensington: The Representation of Japan in the Victoria and Albert Museum, 1852-1912.' *Treasures of Imperial Japan* (The Khalili Collection, Volume One: Selected Essays). London: The Kibo Foundation, 1995, pp. 152-195.
- Franks, A.W., 'Stone Age of Japan', *Transactions of the Third Session of the International Congress of Prehistoric Archaeology*. London: Longmans, Green and Co., 1869.
- Franks, A.W., *Catalogue of a Collection of Oriental Porcelain and Pottery, Lent and Described by A.W. Franks*. London: South Kensington Museum- Bethnal Green Branch, 1876.
- Franks, A.W., *Catalogue of a Collection of Oriental Porcelain and Pottery, Lent and Described by A.W. Franks*, 2nd edition, London: Privately printed, 1878.
- R. L. Hobson, *The British Museum Handbook of the Pottery and the Porcelain of the Far East in the Department of Oriental Antiquities and of Ethnography*, London, 1924.
- Morse, Edward Sylvester, *The Studio* (January 10, 1891).
- Morse, Edward Sylvester, *Catalogue of the Morse Collection of Japanese Ceramics in the Museum of Fine Arts*. Boston: Museum of Fine Arts, 1901.
- Rousmaniere, Nicole Coolidge 'A. W. Franks, N. Ninagawa and the British Museum: Collecting Japanese Ceramics in Victorian Britain', *Oriental Art* vol. 33/2, pp. 26-34.
- Rousmaniere, Nicole Coolidge, 'Augustus Wollaston Franks (1826-17) and James Lord Bowes (1834-1899) pp.262-270, ' *Collecting Japan in Victorian England* ', *Biographical Portraits*, Hugh Cortazzi (Editor), Global Oriental in association with the Japan Society, 2007, ISBN: 978-905246-33-5.
- Satô Tomoko and Toshio Watanabe (eds), *Japan and Britain: An Aesthetic Dialogue, 1850-1930*. London: Barbican Art Gallery, 1991.
- Wilson, David, 'Introduction: Augustus Wollaston Franks-Towards a Portrait,' in Marjorie Caygill and John Cherry (eds), *A.W. Franks*, pp. 1-5.
- Wilson, David, *The Forgotten Collector*. London: Thames and Hudson, 1984.
- Wilson, Richard, 'Tea Taste in the Era of Japonisme: A Debate,' *Chanoyu Quarterly* no. 50 (1987), pp. 23-39.